淺間嶽後編

仇著譚

三

遠
2·003
3

門へ 13
號 2003
巻 3

本府

浅間嶽面影草紙後帙

琴卷上

種彦著

三 逢州執着譚

廿五

巴く照菊が個の山荘に拯君氏集會

細太夫に命じて猿楽俳伎を奥行るも事

却説浅間巴く亟良治八時多ぐ非命の死を悲てより。悲歎やうやうに。仔氏供粮一経を誦し。追善丁寧にいとゞ。春恋愛執尚

まり。又来る春ともむ人多。嗚呼さらぬ日くに疎しとゝど。

忘れぐやのりくれ。ぜあくいい其人の面影に肖つゝ祝く。公ゆりにせんと折に

ふる逢州がもとへ訪よりくれば五郎拯い信ゆに巴く亟ゞ後辺に副て道決

を守護杜鵑花い門首にむかへいでゝ。主従の礼義をぞさぐ。丹公とつしく

又仕なり。柳巴〻恵逢州がもとへ通ひしハ色とゝもんゞ。傾国とゝもゝにめゝゞ。惟
亡人の兼ハ〻〻。ものびうねつ。怒草。恋草。恋草ハ生るとゝもめゝんうと。公卿の稚
兄ゝ花の今ハ盛りく色増る。恩愛殆めつく。逢州と又なる妹の色てねる
公まめ〻なくに代君ばかりゝまつゝせ。仇人の往方と擇。寵意とこげんとゝ
百ごろりゝくゝも詰ひゝ。女の心ハ最浅くて。いつゝゝ巴〻恵ゞ夫に浅くもゝひ
ゝ誰ゝもゝん紫雲の衾のうちに。偕老のちゝひめゝんとゝかりしゝびゝすひ。
ゝもゝく。逢州ハ他の客ばむくゞ。巴〻恵ゝ彼が玉臂に云されば眠らゞ。ゝゝんと
ゝれば。数梅雨にるいく袖とゝろんに憂やうんとゝれば形柳風にも払ひて豆
の歩ゝゝゝゝにゝゝるの且雲の名ろいとひゝく。通ひつゝも田字呉が長ろ
巣ちとゝるゝ。ゝゝば是にのゝゞ。俄に大工とゝのつゝく。下河原雲居寺の辺り。
菊洞といハ処ゝ。山雄とつくらせれば。きのゝハ烟草にゝゞれ。閑寂幽樓ゝゝ

地ゝゝふハ玉楼金臺連延と建つゞき。蓬ぶなくの歩の声ハ吹抜の音色に聞ゝ
松吹ゝぜハ玉の小琴ゝ。ゝゝゝ七十二間の渡ゝ殿三十二間の拍殿ゝ千ゝ歩式宗檀
花梅院大寺南のゝゞひゝとゝくつゝ。ゝ笑ゝ買ゝ木のゝゝにハ錦繍の戸帳
とひき。眉をゝゞく密のまゝふ。水晶の簾をゝゞ。屏風の雪兼ゝゞにゝ
のゝゞく。珍宝いかざり書にうつゝゝゝゝゝゝゝゝ園ゝハ谷川とひきゝれく。
廣らゝなる池ゝ。頃〻ゝ秋のゝゝゝゝゝゝれば。紅葉の楓樹さハやかにゝでる天地
ハ蛍紅ゝくゝゝゝ。四方ハ徐ゝくつゝむがごく。谷ゝゝゝゝゝ橋梁水ゝハ
ゞる光景。さゝに人間の界ゝゝゝゝゝゝゝゝ

皇帝。華清宮にありて。陽貴妃を寵愛せ〜む。我宴楽にはかうぶけど。是ぞ
浴室をつくる。井華洞とよぶ。貴妃がさのゝ花ありとく。紅白の牡丹。
結をつく造る。假山にくくりてね。鳥哢若かるとき。家に安禄山がごとき
奸佞の臣あゝべ。鼙鼓天にひゞき。鯨波地を動もの。騷擾ちゝきにあれべ
れど。良治が近臣は悉恩を知り。義とゝの輩なれば。綱と折るのいさめ
屢ありといへど。且く歩もれど。幾頃又細太尤とゝのめり。彼は世にせ〜
白藤太が孫にて。猿楽田楽師子舞の奥妙をきはめれへ。良治彼細
太尤をとゝびとゝせ。数多の抵君をあつめく。猿楽或は今様の妓姦をまねび。
井華洞に場をうへ。酒宴の奥となるべ〜と命れば。細太尤ろ〜ちくく
検行し。扮きべき役をとさぶら。既に説合ちとゝのひ。其日にもなりぬ。山
荘の瑞殿に伍簾をれて。棧敷をもけ。畳をねどりくをおろし。絲竹琴

鼓の幕のうちにそなへくう。さく巴〜亞。褥に著とひとく。紅顔緑髪の美人
廊をめぐり出さるゝ。手にぐ海陸の珍味をさゝげ出。香醸佳饌。まゝろ挾おき
けべれば。良治はなほいと数杯をかさけ。さて猿楽は

猿女君歌舞　吉士舞　久米歌舞
浅茅原曲　廣瀬曲　小墾田儛
國栖歌舞　隼人歌舞
謌劇八場とさぶめり。是等は神楽散楽の古風なる名式ろ〜あ〜さ入調
きろ〜ろ〜ものにて程拍子をあはせく。〜ちまゝ俳伎なり。人〜ゝ目をぬらひ。
いまやく〜と待わどこそ〜れ容顔端正に音声巽妙なる抵君ふをそれ
と打拾廻雪の袖をひるゞ〜れば。彼青海にねりいでゝるもまれまれいつぐ
おゝらぐんと公やくまぐの紙めく〜。実に雪枝小織〜助が父孫恵大小病記

巴〻一吸
弥勒太を
手にかけんと
時鳥の幽魂

保養のさま。本国近江よりゐるに。主君良治。下河原に山荘をうまへ。只管酒宴遊楽にのゝめり。くゝも条々のうに。公さらにおぼせもなく。急ぎ皇都へのぼり。岱日山荘にきさう。かゝる光景を潜にうゞひうゝく。大におどろき。さぐちに面前へいで。諫とのれんとおもひしが。否やまづ俳徒をそ〳〵のもとゝろまづふ異見のおもむきぞいわゝく。次の間にひかへ居く。日暮く後通ひの女原にいひつゞけ。小織〻助をまねきそう。小織〻助は何変やうんと伝前を退き。父をうと見るうゝと。公おどろれまゝ何ゆへに此処へは来ませーぞと。いひもそてざるにたゝと睨へ。それは側に冊さなぐう。君かくまで放佚無慙になりゝせもふと。暗然とおぼめくゝせ〜不忠者。こゝく此席を退出せへと声かゝさて罵りれば。小織〻助おそるゝいひゝゝ父君の怒せもふとい〻理まゝられど。老臣の涙とゝゝ。ちひあわざる良治公若年の某るか条いて

ゆゝれもへべきぞ。さるゆへにおそ〻ゝあゝへども。君命黙止がゝ却れば宴まつゝなりゝ行るゝゝひれば。涙おそいもく怒り。数度諫言をゝそすんり。きゝれもへぬ其期へ。など潔く切腹いかゝさぐ。ゝるぞ。おぐゝりのゝとひめきゝめざる。汝ふゝくいなゝしゝ。一定天魔ゝゝれゝゝ。我面前まゝく自害をゝび。君を諫ゝそまつゝざる。其刃の罪を贖へべと。老の涙を焦燥。おもんぐ声も大きゝあにかりれい良治をかゝと洩ゆゝひ。ぐゝ涙太をゝるれる。かくて涙恵太ハさゝにおそゝ風時もかゝく。良治がまへに居きさゝくいひるハ君ゝ栄窓にのゝまゝらもゝれ縄錐のつゝめかこゝりのゝぐど。自然ゝに公暫滞四墓がちゝふゝくゝぎのひゝ。さるゆゝるおりふゝれての。歌舞音楽の内飽びへのゝまやゝきゝゝふへ行へど。新花鳥風月のin宴にそゝ剰数多の妓女をめゝられゝゆへど。大内のまゝまへもゝゝ。袁〻大平清盛白拍子を

愛好。ちくふ高時法師田楽を賞翫するの類悉不吉の祥なり。えせ公と雖
はれ論にかつぜめくと。悼る気色もなくなる。良治行ひ人一言のいくへも
なるべし。なれども孫太郎太小織を助とうび生。今まで諫やさぶる罪をせめ
さくやに切腹なるべしといひるる。良治も熾酔の人なれば大に気色を損
じ。ちのこ孫太一族なる者の癖と名ひ一言のとがめ交ぜ。ちもて
たけびをきてちかひ。うらはぶ一子にもせ。我近ほとして召仕ふ小織を助に私よ
切腹ひつけ一条我に對しく是こそ冥業等閑なる老ぶれぶるいぶ其
頃きりさけ〳〵怒をやらむべしと。忽散白双拔ぶやば。孫太郎太とこも為を
惜む。諸をかけて玉殿を出し例郎原となる。孫太郎太首を刎ねくと
合掌なるとに小織〳〵助大におどろき君のは怒をひき出せしも。原小子が
ものやすなれば我をとそは手にうけなくと。走る。孫太郎太撲地とつき退

獨にもいくるどくは側に冊きなぶ。安閑とキもり居さるなどの曲者。君の此手
にかけなられ佩のつれる。我をとそ手にかけなられ「否我とそ」我とそ
と。父子死をあらそ赤心と。逢州も孫太郎に志のひと。楽屋より立出く。は短慮
にいこ。さ手ぐにそめまいるまれど。天子ゆもい出ぞ。めるや孫太郎首ハ
かちぬべく見へるし。が怪むべ〳〵風烈〳〵おさ〳〵きさる。燈火風さまを色ると
ひそ〳〵。さらくと繒障子のひらくく音〳〵て曽て人ハ人へ。唯時多一声。
良治が頭のうへに吼つる。良治ハ酒気忽地とさめく。のり〳〵悉愛乃
ぶく。めるぶ悞ぬ。まづ白双とおさるれば。孫太郎太小織を助も大に悦び。
道理とつく〳〵謙言ばかりへれば。良治も漸くかをあらはる。拉君ハのより
ちく。五條坂の長のもとにうへし。雪枝兄子を招く。其夜繒にかへるのひる。
獨と灯火のきえつるあり。時多のり姿ろく。繒障子をひらきいでさる。

良治が佩刀を拔もちゝまにもぐりそぶめゝと。逢州が眼るハんへとりとかん。
さるく良治鉢にもちかへりゝ。曜麦の方狂死をそぶ。時分が非
命の死。曜麦の方の所為なるよゝまで。注進ひきもきゝざんば。已ら亟
く公さゝにかゞちゝ。嗚呼情むべきハ曜麦あハれむべきハ時分こ救
回嘆息せゝ。又公をひるがへし。否さきざん〻業残るも業順逆二門応縁
よめゝざゝんや。喜怒好悪ハ情のうゑのくひろまゝやとき初ときく。不良と
のいぐくるも。藻にとゝ心実のよれゝうぞ。偽夢蘭菊の二女ゝうひのうちに双
とゝぶ。縁髪反鼻又化とこゝ。昔給も対のゝに。今不知火の葉繁ある。
刈草にく道公と愛顔せ。人の公も斯こそめるゝ。不伎のゝ式まはしう
くく。一向に後悔。呀。かゝる時近臣のいゝをもちひゞ。嬉酒に耽て。宴乱
にのゝめゝゝうゝぶ。愈恥ハ昔にもれ。名ハ後人の舌にあそぶん。止なんく

と二人おゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝ織の帽に令ゝ。逢州がゝゝゝゝ後
ゝ。ゝゝ花街にゝゝ。只一室にゝぶゝゝゝ。ゝ紙ゝれゝゝ。
愛執の恋に暁の寂寞ゝゝゝゝ。炷ゝ
のまのゝゝ。操ゝゝ袂の露の数ゝに仏の法名ゝゝゝ。亡人の追ふく
ゝゝ他夏ゝゝゝ。是いさてゝき実に又星影土在ゝハ往年隠形の術を
ゝゝ。良治ゝ兵士の囲をまゝれ。難ゝく
中国を偏歴。我にひゝき恨とめつゝ。ゝ紙ゝゝ原と立退ゝゝ周く
めゝし。救妻の金銀を掠ゝといへゝど。幸にゝく天刑いまゝゝゝ頃日俗
一条の不ゝに在ゝ。一日蟹塚素兵五完生太九六ゝへゝ。放供無数の愚者
とゝぶ清水寺のゝきめゝ。俳徊せゝ時に二月下旬日ゝく。ゝゝく。
空のけゝきゝの音をみゝちゝゝれば貴賤老若のゝゝゝく。袖ゝ

ゝ袖をまぐ。ちのぶ公くゝ往来うちにひとゝきハ目ざましき婢娟なる婦人あり。されハ別人にあらず。五条坂の抛君妓能花なり。ゝ宿願のゝゆゑなり。ゝ哥の中山清閑寺の観音に詣ぶ清水越ゝ。ゝなくも出て行ゝ

ゝ。夫ゝ公ゝゝて心もつゝ。往ゝもぎんとゝ

なるゝ紙ゝ公に手ひの紙ゝきんめんとゝ抛能花

にゝゝあてんゝく投ゝるぶ抛能花の連ゝ女童の花弁よめゝ。鐘と音ゝゝく

ちゝれば。女童ゝゝくちどゝき。無疑ゝ袖ゝちゝゝと抛能花ゝ

ゝるゝひゝとく微笑扇ゝ捨ハせゝく。素兵五にめゝ。土右つゝりゝんゝ努

ゝゝど。拾かいゝゝゝかゝゝゝ。時に土右ゝめゝの酒房にゝゝ上坐めゝ

居ゝ。二人に對ゝいゝるゝ。和主等ハ近曾の相識なれバ詳のゝゝゝゝ。

今御上ゝゝゝゝ。抛君ゝゝ下ゝゝゝ女ゝ我古主浅間巴ゝ悪良治の母遠山

尼の侍女なり。我浅間の家臣ゝ昔不幸彼に勉忠。ゝ生ぐに口説ゝぶ毒

ゝけひゝゝゝ。頂侍角添とゝふ色従に密通なせゝゝ我無念ゝゝゝく。

彼等ゝ不義をゝあゝ結首を刎んどりのゝゝひのゝり。如什ゝのゝ

ゝゝ。我を國を追放ゝゝゝ。時呼何等由縁ぞや。今にゝゝく煩悩ゝ

きづる鄙ゝゝ。いゝゝる計策をゝどゝゝて。彼をゝにゝんゝとゝち

ひゝゝゝく。二人ゝ声をひゝく。ゝゝゝ最ゝゝ。なゝゝゝのゝ

ゝを労ゝゝふ元浅間家の侍女なりゝ。ゝ客にゝゝゝゝゝ我

ゝれゝの女ゝゝく去れり。ゝれこそ五條坂の亡八田家草ゝ長の抛君ゝゝ

ゝ。彼花をゝ打ゝゝ何のゝゝきゝゝゝゝゝ

ゝゝち笑ひ和ゝホさゝふを理ゝれゝ。いゝゝ未通女のゝゝゝして顔に

似気なく。ゝ強にゝく義気おゝく男子にゝちゝ。尋常の女とおりゝ

慢が却て辱をうけんそも何等の由縁にしてか。拙女こゝにありしかるがゆへん彼
當地よりの人が角徐も共に在んを一定せり。まづ奸計をもつて角
徐に自滅をとらせ。そのうへ、もつて仕能花をもにいきんを。否拙能花をも
よのきたくのち。這奴と退んを公平そしと。一人黙改なす。両人に密計を
諜合。家路をさして飯る○斯てのち。拙能花ある夜甲屋といへる茶
房ようびむくられ。彼家にいたりしが。田舎人の客まく。酒をひさと拙
つけられ。ちりんぞと酔を浚し。席につらなるもの若しく。人目をきのひ
く枕子をくぶり。顧がちに鶴歩しく。行廊をあゆみやきしが。斯こゝ天
に知者なく。人目あれば志ぶけるき。貌形をもつくろふぞ。胸のあり
うちくんろげ。畳紙をもうち扇ぎ。そよ吹風をまち居るに元々茶房
の。細く許なるなれを。定にせきいれられば。出方に咽水音いとたゝしく。

小笹の雷光鈴の火新にてうく。夏乃夜の蛍とあやまられ松が枝の蜘の巣
の。風の随意吹ちうく。秋の野乃尾花に似たり。かゝるありかゝ情ふさと。おし
ひしき。拙能花が裾紙とらふる者あり。打おどろき。推やるそまのぞきたるに
るとなりしれど。こゝに相識あるぞ。されど容貌行ちやん見おぼへ
あれば。夫ら彼ら、ちりんまるぞ。唯是わらの拙女の容ゝ。我ハ知らざるを。
彼方ハ見れを志るゆえの戯れるんと。ほゝと微笑て。ろの不どうろ爰ゝ
び居く。人驚るしかふ悔さうとあくハなる暦をおもひ。袷撥拭ゝ袱紙ゝ
ともれど。志ゝと拭うくたるさどいつにも推しのよどく。ろくより爰ゝ陰沼
の。底の下苔。水隠れて。志れぬ恋のうさ。志ぶ。志ゝ。ちゝ。
ゝや六年七年の必見ざれが我顔をもゝ見ゝ。かゝのふハ仇者ゝ
良くせ。星影土右ゝなりと。少く拙能花ハ再びおどろき。熟見る果て

其人なり各ゝ悪さまづうさに。狗おどりく おとゝのゝ。土左つなぎねく
いひ々々人往年袖の上りの花見ゝく。四方と角弥ゝ密通を。見あらはせし
其時ハさぞ無念とも。おりひさ〳〵んがゝく 那武矢人の人。角弥ハ其席おく
切腹なさしめ。四方ハ女のこなすまび。切。命をヤレひ。我おりひをたゝ〳〵さんとて
るのせ〳〵なれば。是悉四方を慕ふ心の実より出るにく。強見れを悪こゝのゝ
由縁なるゝとゝるに方近くゝうんとなることを。杜鵑花へちゆくも退きく。傍に
うせなつけを。聰を衿にさ〳〵られく。夫に一言の答もなんさぞ。土左ハなる武
声をひくし。這奴何の容止ありく。武所へきくりゝと。嘲ゝのふもとく公行く
行くど。めく何等縁〳〵にやゝ方のとゝ少時ゝ見ゝとく。再度環令おりゝと
ゞゝと。公の怒り遂よりくひ武頃ゝの中山より。清多越〳〵く。おりハさぞも
四方に仕ひ武花街の拍晨となるゝ。歩とひさく。人の誹をかゝりゝぞ。

まゝく来ゝん狗のおりしの中せゝのきゝやゝんぞし情ゝきなさけ武もかぐゝん
かけくゝのひねゝ。ゝちつけにハ説ゝれば。まハいくよりて言さゝんと。須臾打葉じ
なるゝ。元来土左ハ奸曲邪智の曲者なれば。強く辱をめゝふるゝまゝられ
のゝゝう夫ゝまぐ。いくなる奸計ゝあちらゝんもゝりぐゝ鬼ゝ角ひゝろあく。
武場を難人ゝまゝ去るゝ。ゝぐゝと言葉を和げ。田舎そぐちのそゝなるき武
杜鵑花を空言ゝもせよ。切切ゝきとくのゝハ居ゝのゝで外にめゝべきゝ。昔
をりひ出羽や。宮上の川の稲ゝ丹のゝるとゝにそゝねゝども鍍にめひし
その頃ゝ。昌武けくゝもりてなすせ〳〵ハ四を告ゝせのハぬきき角
赤ゝとひゝハ〳〵れば彼方の志を彼ゝ。ゝ殆為仕なき処なり。かく
きゝゝえ行べゝハ何人ゝ悼るべきと。宣んが。昔ハひゝ逢ゝ袖を払ひゝ
拒女となりくれがゝく。又其人ゝ横陳〳〵ん妾ぐりの恥なゝぐ。空ゝ

恋を慕うの君傾城となつるゆえ。遂にハふり人をたるゝ〜とハ共に悪名の巷にすれん。嗚呼法世に憂のかゝるひあり。世ハ行るゝ不どゝるゝ〜きものにあらじをゝとあゝ言も果さぬ。まゝ世にすれぬ未通女のゝうゝど徒ぢやる言葉の文にとりうそうちも。外に人や歩つゝんと。傍に乳ぢくろう。酒乱茂〜く。顔ハ夕映のり〜ぢ紙ちし立居に衣の香りれく。梅の木の百とゝぶるゝとちるれ強きゝ公さきゝ〜ぬさもにゝをゝぶゝ〜ろ紙。土をうハなを忍ぶもやゝりん近くゝのゝり。我をぢかり聖ぢちじと歩るゝ素じ五郎義経縁附のゝとゝんゝよゝ。不孝のゝも宜なり。と言ゝるに。杜鵑花ゝれて驚き。「ゝつゝの立ゝ孫と宣ゝるとゝん「ゝ益ゝるつゝゝるひと。須磨用弥変名。新ゝ五郎義こゝなつゝゝるゝ言ゝさゝゝなり。我にきゝぶゝ素兵五太九六と間老ゝ〜く。夫彼ゝくに歩ゝさゝり。ゝられだや。連ゝ節義ハゝち捨く。拵女ゝ

ゝ刀なれバ終刀を誓ゝるゝハ稱ゝとゝも只仮のちぎり紙むもび。一夜の情けのゝ。明日ハ青道公となるゝくゝも恨ゝんゝ。ゝをゝゝ〜。不ゝく猥ぶ〜きにゝぶんゝとゝるに。杜鵑花今ハ怒にゝゝうね。ゝ刀ゝ昔ハ浅間家の近臣なれバ。聖賢の書の一條ハ兄のゝゝゝ。初ゝ紙ゝ道理紙ゝ〜くゝさゝゝるに露歩ゝさゝのゝハ最愚なる行跡ゝゝる。夫女ハ大路ゝ歩行ゝゝ。額に扇をゝゝ。袖ゝ恨ゝ〜く羞ゝゝぶ〜ゝひゝく。両夫ゝゝゝゝるゝりゝく。二張の弓に比し。踐二庭の譏ゝんせん。ゝゝハれど。憂川竹のなゝれゝ。ゝゝ刀ハ常の女とひゝうゝゝ。ゝゝハ隔ゝく白地ゝりのゝゝり。刀ハ千人の指にゝゝゝく。彼ゝそ行某ゝゝ拵女ゝりと言ゝゝを却く弄び公ゝゝ飄客の舌にゝゝゝ。ゝゝ〜ゝゝゝ。ゝゝゝゝ

べ。爰をとく歩るきのく。かくまで罪の深くぞり。松のらねこいろく方も。女ら
かなず女まく。自他うさうる心よう。異夫をひさねるふくめじ。貞をたすれ
さく貞あり。操をとてくさやあり。知せのふくいハ祥に言にかゝぶねども。
不角の頃よりしくいひかやしる其人の。長の病苦に除方なく。拵女さら
なつさをど。夫に自滅をとゝせんと計らる仇歌る小夜衣をかさねん事。
息まきあゝく言る式土をつハ目住にまり。口賢もいひつるる。斯なる上
ら。千〻金にその才を贖ひ。おりひをとゝさぐ。あくぐさ事と冷笑ハ杜鵑花
ハ眉おりひきあげく。色と情を販く方と。怒を笑ひにまざらしく。拙れら
る恋なるに。歩くに憂非美非道人の面獣の心とぐかゝるとも。職へしと。
坐をくんとなするに土をつゝる怒心頭ろ。おとり。裾式扇に突さもる。杜
鵑花ハ式ちち。拔ちち。朽ちる畳帝面にうちつけ。力をさぐめく。袿乃

裾をとゝくハ煩悩の犬つくだひよ。撲地と。又起さちく。とゝくんとる折とそ
あれ。彩にかける焼鈴を。的に何人ゝ打る。碟燈ひきとゝく。翡くゝ。北
鵑花ハゝとび庭にありゝち。木彩に才をひとゝある式土ちら文にとゝる
つゝど。急くゝ後堂に逃行しとひ。何やん一人恐怖。一室のうちへいそにゝう。
時ゝ栄折戸を剥喙と喧ふ。あり。杜鵑花おそるくゝ。歌で。是則五ふ花
すゝ。且おどろき且ゝとび。ゝの程ゝう。爰に怒びく居のひゝ。いま星影
土をつゝよめゝりのひゝと。言をとゝめく。我獨ゝの拵子ハ垣の外面ゝ歩居
ゝれば。再び拾るにかゝゝぶゝ。又碎をもて。焼竜の火を打消しに才を密に拵き
ゝとのひさ。辺に人やあると右左を顧。縁側に尻ちもあけ。人八情に突かさ
ちく言ゝの。頃日良治君本国の地銘まわさゝまぐの怪異あり。是悉時手の
方を刹害ゝ。然竜のゝとゝにく。遂にハ瞿麦の比方もゝるひ

どゑん
土右衛つ
ふさび
甲屋にて
さつき
杜鵑花に
えぐりあふ

死をるーのびくと風に吹て。杜鵑花い然いふ式知まりやと問へば。声式密め。
其夏八君ゝう玉章に言おーのびくーくく。逢州主のおがうにゆぬ夫ゝう逢
州主も只管にあり伊屋ーく。只わねぐに〳〵ときのふと應まぐ。立ゝ蔑ゝ
吐息ーく。愛ゝ一の難弐あり。其方もかれ〳〵ちうつ〳〵ん逢州主の揚代それ
ゝを百両あまりの頁めあり。田字草の長我をもゝること巌原未温柔ゝ生
ゝちの〳〵良治君。さるとにい公づきのわど。さればそ〳〵れ銭も濫ゝすゝざるあり
わ。斯とゝとゝんも。近臣のゝたお怪あり。そぐりふ〳〵い支果ト。憂ぶ中仏又憂
ゝ式ゆゝるふ。かなゝきにい似つまぐど。恩恵尊き君のに為我ゝとゝく力を
そ〳〵小金才覚ちゝゝぐどうちちめうくいひれば。杜鵑花いまんば狗ふさぐり。
妾ゝとくゝう小金式調へ頁めを長に伐ん〳〵ちゝへぐもゝと。言けちて潜
然と泣。立ゝ落も瞼ちぐぐゝき。呼半頁めのこのゝ若にゆゝゝい。労てゆゝる

竹。金ぐゝんのもの持ゝ。なゝぐ抜ゝ立ゝゝ袖を。皆とひゝ。まぐのゝとも多竹ゝ
ゝ。ひゝくゝそひれど公強否くめにゝらば悪ゝ〳〵んと。立出ーぐ又立戻ア。ゝゝ杜鵑
花いゝぐゝくゝひゝそひ逢州主に頁めのゝゝいゝ。ゝゝ。ゝゝ近きに忍びて
来ゝゝゝと立列ゝんとゝすゝゝる。庭の小垂の歳ゝう。曲者二人あゝゝ出
出。りの式も言ハも抜ゝちにゝゝ。ゝ切ば立ゝ落ハ花ゝのゝく刃を持
せ。右と左に投退ゝう。あゝゝやゝと杜鵑花が声ゝゝる式。立ゝ落ハゝ式めゝく
ゝぐゝ。ゝゝ〳〵めねと奥に追ゝう。優ゝこーゝく立出ぎば。曲者ゝゝおそゝく
あゝり。白刃をゝ引提立ゝ落ゝ。背後ゝゝいて往ぞゝゝ。知ゝゝ去ゝゝぬゝ天八
を公にゝゝ去ゝく吹ゝゝゝ。顧ゝゝぜぞ飯ゝゝう

第六

立郎拯杜鵑花ゝゝひ遠ゝく逢州を殺ゝ
土右衛つ再び隠形の術を不ゝゝゝ事

世の中の憂変はこれ丹のうへに。ふアもアまゝる裏の面丹を去る百人ぞ
おまへ。杜能。花ハ一人桜に。おりひとびつ俺しも。堀中のりふり雲とうり。俗
のおりひもたまもうぞ。人気なれば吐息をつき。陽恩うけし主君の地
うあ。天に斉き良人のうゝ。代丹ハ行等憂目にあひ。金に於ふとあり
とこ。ちげ厭。乳ハあゝねども。探をきりる山う。公の下級うち解さ小寝
夜ちうさ川牛の流よちづむへ谷のゝにく。行人ハ小金の才芸紙いひ
る方もあゝ次多くさ家ハ妻なゝ。花もさうざる憂丹ある。陽呼兎
角に好ゞさきりのハ。世の中といひもく。只僕ゝと皮に名り。ちる折
ゝ一室ゝう。その金代丹にあくへゝと立生ゝる土右ゝつ。杜能花ハ少し
うさてゝと立上る裾のうへよ。百両あまりもあゝん小判をいまゝ紙布を
たゝと投出ゝ。杜能花も金の才芸に。おりひ居ゝるおアとい

小金の紙にもさ巻ねゝ。代丹のゝあに徐とてあまゝ恩もうさ妾夫婦
多なる小金紙のうゝんとゝ。よも実ゝハありハどおそるくいひゝまゝ
土右ゝつひゝと打笑ひ。女の洗ゝさ山ゝりわさおりよも右ゝう。其丹も憂
めにあゝくも良人のうあるハ厭ハどゝ代丹ゞ今ゝ一人おちひゝとゆる
恐だ。代小金紙まゝもあいゞ。立ゝ義ゞ當難を清ひのゝと信ゞち
くいひゝまゝ。杜能花ハ不審なゞゝ先ゝまゝゝく。取めゞんくとゝる
手紙ちゝひ。紙布をゝつく猿のもとりくおきつゝゝ杜能花油の波乃
花見のとき。遠山瓦公の代丹にいひゝをおゞえあゝゝめ落花ひれが
流水又恨めりと。代丹に落花の仏なくて。我何ぞ流水の情あゝんまの
小金紙ゝんとゝりゝ。一茅ちゝくゝと出ゝゞ。我にあゝのひねこゝりひ
ゞけるき土右ゝつゞ。言葉ゝ聖ゝ。ちゝ案に。妾に出と宣ゝとゝハ其小金を

借うる券書くやんのごとにやめるべき。夫なりまび最ゑやそーこいくぐ土
たるつ頭をふり否券書ゑんめじ。五ゑ捨へ離状ゑき。我まくろよ従ぐらぐ。
千くの金も惜にくるまぞと。少て壮観花いおそきいろぐ。坐を立奥へ
せんくまと。土たるつい敢くそぐもる気色もなく。答もなまぐまち去る。
代金弐分といふ。ゑをうさにやめくんまぐーん。代金なりまそこ。代対
夫婦ぐ浅間家へ。時恩を報ぐまさ。其期を誤つべーさんがとて手負ゑ
金をめくべーと我いいぐ。そこ代対ゑ。弐て腰に
おさめ々まび。壮観花い千ゑ百に念ぐるび。少時答もなまぐまーぐ。
ゑるるいまづ彼にまぐ姿ゑくせ。仮に離状をまく良へおくり。
彼金をりく負めを償ひ。その分説ゑ自害せんとおひさるるきく。
土たるつぐ傍ゑ立るる。今とたりく妾ぐ恥を君に少ゆりも伝るれど。

かくまでも実めゆ。君ぐゑゑ代ゑけ。おるるのるち代捨りまるーせん。妾疾るる五ゑ
蔵ぐ赤条ゑとるるーを疎ぐ。縁を鈍まくおるるーぐ。富につき条に離れるび。
人の非我才のくゑ。おるーべーと。つまぐ言条に出さぐ。君若其金代妾ゑ
おるるのるるとさゑ。立る蔵ゑ与へくる。主家の用ゑ完夫を功ゑ。五ゑ捨と縁
をくるるる。君ゑ終才をまるるんを。最易るるべー。愈金をめくゑふやとるひ
ゑれべ。土たるつをゑなるくるるゑ代ゑ。代対場をさくるぐ。五ゑ捨へ送る
べき離状出るく。我ゑめくゑ。今青田宇草ぐ長ゑ誘引やるべいるに。金代
めくゑべーいぐそくくと催ーく。金へ残布のまく。壮観花ぐまゑくゑ出ー
ゑれべ。条ーくるるる条。君ゑやくを実めり。妾も行ぐ。実るくーんやこまるん
のくくと遠概るる。祝の箱をるるおるる。流石面るくやめるーん。るるいーくるるへ
ぬまぐに遠ざるる。もとーー炬火を背。ゆりくくるるげゑるる流も。まへやるるぐ。

赤虫なる女の公一條より夫ゆえさるく今下毛や鹿のまさ芽とりあげく山吉の尾のなぶくとくりかへ〜る巻命に出流ぜーぐ熱ゑんくわるさなーとり彼く又出ぐ〜壊ぐ〜戒刀より撫く切どきれぬ芽の役さえ〜や世に短き芦のかりぶきと涙く〜〜くさ〜出せば土右ゑつん介莞とうちゑゑゑくも出て〜く文おさも金弧壮節花より〜〜いそぶへ〜く林子をぐさ暗号を送くうち嗽べ庭の隈より太九六素兵五めくふき出土右ゑつぐあに娼さ。さくくも命下まちぐひ庭の木陰よりくろひめく。五ゑ孩が飯ゑ紙まち只一ゑちを切つけ〜に這奴を強りの何の若もなく投退らき。ろひのゑろに辛目ゑく。ゑれくが命既ゑ花ゑうつぐ。ゆちりひん後をもゑんぐ〜く飯ゑ〜ぐ。怕く背後ゑつさく。ぐひけぐも。這奴が勇気烈き出えにやゑゑて打めゑひゑもゑ〜。首領彼をゑちゑべき。手段をめぐしのくとゆひけきべ。

土右ゑ叮くとゑち笑ひめ〜言甲斐ゑうき奴ゑる。彼ゑきに惶戦き。逃ゑ人ゑ〜捷病を白地ゑりめぐゑん虫なゑことや賞ぐき。祇ゑ〜ゑ笑ふべきとゑゑゑ〜ゑ顔ゑ彼壮節花が玉ゑ式ゑ玉ゑ。是ゑそ壮節花ゑう。五ゑ孩にゑ〜ゑ離快ゑ我壮節花を言賺くかせゑぐ。二人ゑ急ぎ五ゑ孩が家ゑいゑう。這奴が怒をひき半。門辺ゑ付文付止ゑとゑ〜ゑぐ。大ゑ公ゑ文ゑさゑ。五ゑ孩にゑの離快ゑとゑくさん八最公ゑとゑきゑゑ〜ゑめゑ〜ぐ。我ゑ僧ゑ投退ゑ腰痛く〜ゑえぐ〜。対ゑ後ゑ赤兵立に今ゑひねゑゑゑ。赤兵立に撃き投ゑ〜ゑ〜ゑ〜

登りいざるく田宗草ゞ長に中くべーと。いそぶしくろれば杜鵑花い蔭るなく
かわく。堂を帯のうれさーとさく妾常に積裏のすりひめり。時を明くく
ひとと移尾とさくく。言さ人おいと若し。かくくい程迫を長ゞ家よも飯や
かくくん少時ものうをといひつる。又折伏く息をうあげにえそこ。
土ちとい仏けぬ面もち。くかなれさもぐ賜くくとぶ杜鵑花憂乱よ
都めぐ。往ぐくるいぬとめくぶ君ぐうまきめ妾へ病愈くのちを用に
飯ぐーと。鬱結ーくく文に人変をきくぞ。土をうい文に怒り我ひとう
長ゞ家に中くおどかくく。言葉をつくくく離狀をかくめ。行ぞい今我手人や。
是非に我を後引ぐーと。悩る杜鵑花ゞ花ゞ式ゞくく。門立人ともそれくく。
やよ少時待ゞくくと声ゞ。帝門さくひくく。わくく二人ゞ中にこけいう。ゞに特
くる歯府をめくく。土ちうを押止る者めり。維とうまゞ是則逢州之脂粉

の姿い雲を髪に起し。羅の袖い茶の秋を拭風情あり。惟是乙織女の下界ま
ぐるうとめやまる。さくく逢州常の粉るゞき声を生くいひるゞ星彩
主とやうんるい妾をゞきしのまゞ。杜鵑花主ゞ姉妹のゞき逢州と云女
ふぞ付ゞ。妾も頃日病に若くく。枕をるめげざりーゞ。道まるることありて。得に
山茶まるさくく。変の一二ゞ。帝門のめなるにく歩付ゞ互に答の頃ゞ
くく。言ふーくる其人に離狀出くく別をゞ。ゞ。ゞ。

の丈列
さっき
杜鵑花に
かつて
どきりん
土右衛つ
と
田字草が
長る
いざうと
屋
ぶとや
條坂

酒
屋

やうげ。兼くゆかびさる花魁逢州主のさきぐさにけいひのふをゆかぬ
ふんあ〜ねとる。田字草が長よ誘ひんで契約まく。金まぐさせーに俄ろ
病へ公ちで。牡丹花がうに吾にうちすうせのくと。又立ちうんとなーなまば。
逢州ハなぜ紙ぬー隔さおどさぶ波風ねちうしひわり。月のへよ妾ち髪ち
ろうあげど。外ろるまくの月到衣白綾の代小袖と。牡丹花主のさるやどさる。
目結の衣とねぐさく。藻蒲芦よ霞水。ちまちね者ちうさ。牡丹花
まのの捉炮をりうせなぶ。夜目にはそれとんちに袴ち一對よ。
胡蝶式縫ひーち時の幸ひ妾を仮よ牡丹花をちひめひ長ち許に
いろうぶ。初なく主の病ちおと。後ろうさうのふべと。流石よ里なまー逢
州ろまぶ牡丹花がふをくち推ー。土ちふをふ処よわせどく。言葉を
くくく賺ーおーらくまぶ。土ちふちを逢州が無舌にいひまんさまちぶくよ

兼引ろ。牡丹花ハ最ちびーげにもつやく言ちりぶ。過切よ離恨を出涙
ちるさまにりくは。調ちるふまぶ。狭ーうちまく。逢州が耳にはを書
密よ五ち恋ちのにおろのろをとちびう逢州ハさーぬ面ちちーく
ろりかくー。是ぞあのーろ列をろふ。ろーう後の衣脱ちて。牡丹花ぶ狗ろ
火枝草我才のくよそかさる。行蓮の大脳の俳麻子よ。雪の机の涙
くやくーぞちろーどーく下ちふ。三悪道の脱拂子日ちる陀の陀不鉄
も。一足宛よ死をいそぐいぶせくと鬼ニちさ火車ち地獄の使ろく。無
常風よ吹くー。明くを月日ろ隔ちー。今の移ろ根や食人星影といふ毒ぢ
ぬり。さきに猛虎のかくろと。ちすひちかけど逢州ちー。さきぐくに言慰牡丹花
をど甲斐よ持ー。主ちつとちち連ちち出ろ。是ハさくふち。素兵五太九六
の両人ちー。所冥の五ち義が侍家よ撰ちち。僧のよかくにや警さ名門首よ

傍徨く内へいらんと。行ずん壯觀花主が是送りするとくいろ玉章成
らげ歩し。定めやに逃さうろう。此時五ら蔭ハ家に皆只一人あざく居て来
ぬさ行末のこなんど。おるひめづに。手紙又くわらしが行の仏をつど。壯觀花
が文を手に取あげ。燈火のもとに振うへしく續えらう。且あやしく且おどろき
まを正しく休さろう。遐刻ま金うる其時ハ常にいつにてもなくうつく
ま智らる彼が胸中。女のもとうり男の許へ離れかるる例をなし。ある不審や若く
へ主人。我怒をひさ当んとく。然てしくふいあんと熟ゐまど。壯觀花
が手にまがふべくもなくまび。少時黙然さしく。左往右往におるひめづし
稍あるく念然とくく怒をおとし。最前星影出ろう。甲屋にく壯觀花を
とくく言ふをつゝしては渡しを彼ハ厭ふさ牛ひしが。定めがきれ人仏我赤
魚とかりを味其方を彼にまをせるる。否。夫を我潔白なる仏ろうへつる

推量とのべし。今ハそもひめろう。さくろ壯觀花主ろうに驚くるの一件。
懼ふ我垣の外面ふ去のぶを知ろうとと難面くるくなるさ式ふ式を
ゆるるを。這奴ども中にいひつけ。我を害さんとくるる運つるくも脱きて。
めるかそろべしくと。数回嘆息なるせしが怒ふ堪ぞめるくんぞんと
立てく押入をめる命門の廚ふ焦心くろ出ぞ服ざ。靴にふせる妹
鮫。俗世紙帶とも糸に。ぞまぬ菱の双索を。喋ふるるくく走出る。
ゆく怜悧人ふ勝る立ろ技といくども。火性短気をいんせん。玉乃瑕るや
比ぜん錦の手ぶまるやいくん噫く却説逢州ハ土方ろを誘ふ甲屋式ち
紙ふ式疫も真に似るやるど。空さ人墨かちにくそん吹風衣さ花の
雪ふくるもようやおぐるくる芸ある子狐を告ろう。魚鮮をせ
魚鮮を接摩法癖とうびあるくく。軒寺犬の吠るとふよ打まて

のさまにく甲斐のふぞろひまひき智り。花街寂寞うてと夜色又幽
くり。発火車ハ逢州がさまさにとくく後にこぐり。夜さとも更闌くまでたち
をいそぐせのくと催せど。逢州ハ壮餞花がおもひ浮ハをうるゝ堪うね当離を
くとけんそく。土左つを誘きくしやるとて田字草ぐ家に飯ゝ後来や
せん角やいろんと。公を公ゝ。あをこうの雲のくさこ牛の星あるに接り
白くのくゝ又へくるも。行とかく風姿めアと枕めアげに物がり。寛ゝ弥ゝ
稼にのゝ。間のくせんとくく委行小止くきび土左つい気を焦焼長弥
ゝいくらかぶ疾壮餞花をとびむくめへ。斯ゝど近き路代往ゝやむと
くゝ病ゝまめるゝまゝと流石逢州ぐくちゝぐくる。ちゝ行所ゝ耻ゝちん
其外のくゝ言ど院ゝ田字草ぐ家ゝも近づきくり。さてゝ市所の五ゝ巻ん
ゝ中ゝふく面をつくゝてゝくゝ逢州ゝくりゝさくゝまゝ。辻方焼の新に身を

潜め。今やくと待おアくゝ。藻浦黄に震水。おどめる壮餞花が挑燈来る
其客ん。まぐどもなき土左つくり。不法の大戦水性の婬婦。這奴両段と色
く。怒をたゝめんとくくり。元逆のぐ。眼くくゝ。衣の色のひよのゝ。をこゝ。逢
州が面ハ又くさぶあぐ。往先へほとめくゝ。生腰刀同ゝて。挑燈撲地と切落
せど。めなやゝと恋が叫ぶ声。大車ハ白刃をアるくゝも。足ゝくく起るゝぐ。
逢州ハやねくくり。伝を討んぐ願めくく。公男くきさ女ゝきぐ若や吾伝
の余類反計にせんくく来アくゝ。さるにくくも便宜めくと。ちくもゝちぐき。
的下ゝ知ぬくさくく。善悪ゝきくぬ暗を幸ひ三間ぐゝて逃ゝく。衣くとゝくくる
炷扨の薫を知方ゝ追ゝく丸ゝ。板金剛ゝく背後ゝり。裾ゝ走ゝく。暗止
ぶ。桂冠くと脱の空声さくくそぬ虚蟬の。又逃出ぶ又退ゝき切ゝむ白刃
い今くく。腮ゝさんくく空を突。くとぐゝに。悲退逢州拾ゝくさぶる

五郎藏
杜鵑花と
とくしまて
奥州と
よろ
と

紅の肌をかくしも踏ぬ。撲地と倒れおちるとぞ。隅四五寸切さげう。
呼つと叫ぶとおろ〳〵げに拾髪ちつくひきまれ。水の双猟に突つけ已ひへる
こそ時恩を〻ーは主君の勘元をくふもり。今〻なろ〻〻雙歌る。土右つ衛
をまもせ。栄利をくる老野狐我ゑ耻辱をあくーへ此猟ゑおぼえめ〻ゑ。怨
の双うけろ〻〻と。声〻ゑる間もめーせべと。力を究めく〻〻とそ。雪の膚と
紅の鮮血に染く魂〻ゑる。玉の弟地ゑおちく。今仙境ゑや飯〻ーゑ花の姿
を見まてつゆ〻の雁と云に啼。声〻ゑ〻ゑに息〻〻〻ゑ。めゑゑゑ〻ゑ。
さるにくも土右つ衛ゑ〻ゑ。見めづ〻と折ゑ。泥めを雲ゑぶを。共日
あまりの月山の塔にさーのぶり。皎〻と〻く白日のごー。五〻花佶度折ゑんすを。
いつの程〻ゑ逝去ゑん例に人気なく。唯土右つのゑ自諾〻〻く傳徨ゑ〻〻。
這奴不歌の曲者退〻ゑせーと白双〻〻〻切めゑ〻ゑ。土右つ衛ゑ光介〻〻〻笑

かのを来つて虎の髭をそこんとこるや。嗚呼危こと廣言なつて接合せ
丁こと戦ひしぶ。奇なる哉妙なる哉朝日にひう〳〵霜のごく。土をつが飛忽然
とさえんせ。只白刃の〳〵虚空に閃き。撃ど払へど手おえ〳〵なく。霰を切炮を
突又陽炎を拔るに似く。つんとも絵とべかく。不ろく危く〳〵えけるが。
五郎兵衛不斗公づさ。眼をそやく熟〳〵るに姿さそ〳〵ね土をつぶ壁人月
ぐけよのりくと。街上へうつりくさぶ。扨おて彼が幻術も大嵯の位ふ勝を
わこんどとおぼや生。是天の助なりと。影を的に変をきる。土をつを立ふ孫
が勇気えげまさに。敬ゝがくやめてくん。又も八重雲吹さぢく。月をかくせる
雨曇よまぐれく遂に迷失りぬ。かるる処へ花街の雑戸。手ひぐ拔を引るけ
つ。提灯とりつを走集ひしが。五ゝ兵がを白刃を引捉るれ〳〵近くも遁ぢ。
のを元逃さとぐひ遠く用く夫彼と置居ろう。五ゝ義を今ハカ〳〵

逢州が首うちおそ。神ひらもぐろく腰ふむとび。郷の離状をくーなひれむ。
賊の白刃うちふりく。遁のろくこの辻行ぢを。元来ア公徐よふねりぢ。逢州
がろうおとせ。杜節花が後のゐ書式彼離状とおろえ拾ひあげく懐と暖と
おさる。伝もおさ雑戸よ疵をおうもんも罪深ーと透間を窺ひ。行地まかく
逃去りくさく花街の雑戸おハ逢州が亡骸の傍にくろう藻蒲英の
優紋衣の色のひ切落ーくる提灯のあるーキぐ。疑ふたる田泉草が長の。
杜節花やりべと言ろくおろく。杜節花ハ甲斐よめろく。かくゝ舟メう
夢の浮橋ろるゐちーと走来ア。亡骸をアるうさあサりのように涙を生ぞ
忙然ーく傍徨ーぶ。為ふハ逢州が白徒の小袖を見ぬこう。郷ーう唐に
苦ーく。髪さへも乱をつれば雑戸ハ一めアるうり。のかやと出びやく杜節花と
の幽霊非業の死ハ是非なく。あと憂愁憂に吊ひまひくせんえやきえの人

南無阿弥陀佛。るしめ。ぐぶつと。異口同音にとなへ

十六　後條

田字草が長ゝ。花の司とゝのゝる。逢州を殺害なん。剰其人をさへ
ゝ逐し。何者なるとも。志めりがらにて。次の日と既に暮なんとす
る。逢州が非業の死を泣く歎病と
ゝ。己が閨房にゝをちめく居ゝ。若千歌のもがりにもやうゝ
。昨夜死骸の傍ゝ拾ひ集る玉章。元生ひしゝ。そひがなや
丸ゝ花へかゝゝる離伏なり。壮節花をかおどろさ。尤往石往ゝひめ
ゝゝ昨夜離伏をかゝゝる。実とおもひ良人の怒をひゝ出。妾を
害さんとなり。遂ゝ逢州主を殺害ゝ。ひゝなんまゝいんせんと少
時度ゝるが。信度ゝを敬ゝ良治ゝ夫ゝ因縁ある逢

州主を殺ゝる分説まゝ。五ゝ花ゝの切腹まゝに疑ひるゝ。無益ゝと言ん
ゝ。妾ゝゝに自害ゝ。人を殺せゝ悪名。我身のゝ人ゝゝゝべゝと。五ゝ
花にゝゝんとゝ。逢ゝゝる移入をゝゝ。往の上にゝゝる。手足の肉
ゝかゝゝゝ懐剣をぬゝゝる。尤の小服ゝ突立ゝゝ。流石女の心弱く。
鮮血ゝゝと潰ゝに瞑眩ゝゝ。撲地と顛び。ひの帝門をうち
ゝゝ。ゝりのゝゝ。打驚ゝ。於狩ハ周章走来ゝ。ゝゝ壮節花ゝ主狂乱
ゝゝゝゝゝ。於狩ハ止せど由縁を少せのひねと。安ゝ
起せば眼をゝゝ。於狩との指子と言ゝ外にもあゝ。昨夜逢州主を殺せ
ゝ。ゝ壮節花ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ人を逢州主ゝとゝ
ゝ恨ゝ。ゝゝ殺害せゝ。閨室のゝゝに不善をなせば。鬼得て見を
誅ゝとゝゝ。ゝゝ逐ゝゝ。ゝゝ罪せゝれんとゝ。ゝゝ。潔く自害ゝて冥途ゝ

おもむき仕るなり。あらを山と立て義ぞのに仕くのうをとつくしとくかを
ひきまへさんとすれば於扨携アとぶやく曰逢州主の最期の一條も
妄も公に徹せーとあり。先へ一旦にしくまとしーとまぐ時待の人
ひゆとべきことあるとどさまぐよつるアとる

浅間嶽後帙逢州拠名譚三之巻終